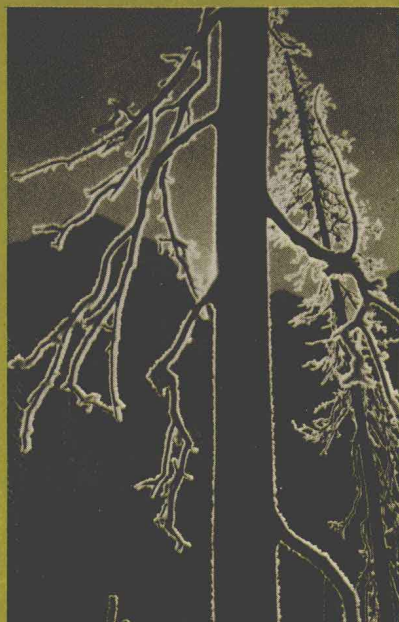


現代カナダ文学

— 概観・作家と作品・資料 —

浅井 晃 著



こびあん書房

東 京

現代カナダ文学

—— 概観・作家と作品・資料 ——

浅井 晃

東京 こびあん書房

△著者紹介▽

浅井 晃（あさい・あきら）

一九二五年栃木県宇都宮市に生まれる。

東京大学文学部卒業

大正大学助教授

日本カナダ文学会幹事

『カナダ文学案内』文芸広場社

『小説に描かれた教師たち―現代世界文学にみる』文芸広場社

共編『日本とカナダの比較文学的研究

―さくらとかえで』文芸広場社

現代カナダ文学―概観・作家と作品・資料―

定価二、二〇〇円

昭和六十年十二月十日 初版印刷

昭和六十年十二月二十日 初版発行

著者 浅井 晃

発行者 木村 欽一

印刷所 誠友印刷株式会社

製本所 宮田 製本

発行所 株式会社こびあん書房

東京都文京区小日向三―一一―三

〒一一二（電話〇三―九四一―四六八三）
振替・東京3・一九一八―二番

3098-0033-2444

ISBN4-87558-022-3 C3098 ¥2200E

まえがき

カナダという国は、ひじょうに魅力的な国である。ヨーロッパやアメリカや日本などの先進諸国が文明に毒されて、多くの問題を抱えているのに対して、カナダは先進諸国の仲間でありながら、二十一世紀に向かって希望をもてる国なのである。しかしながらそれはカナダが初めてから恵まれた国であったからではない。国家としてはいろいろと不利な点が多く、悪戦苦闘をしてきたとさえ言えるのである。第一に多民族の寄り集まりの国であり、アメリカ合衆国のように独立戦争に勝って国家としての誇りを持つこともできなかった。とくにケベック州に住むフランス系住民と、イギリス系住民の間に長いあつれきの歴史がある。また北極圏を含む広大な土地は、その大部分が冬季の寒さのために居住に適せず、アメリカとの国境に近い地域に带状に国民は散らばって住んでおり、人口が少ないために国民の活力が弱い。そのために、長い英国の植民地支配と、隣国アメリカの経済的圧迫につねに押さえつけられてきたのである。

このような不利な条件が、二十世紀の後半になって質的变化を生じてきた。人類の最大の不幸である戦争、貧困、飢餓、疫病の脅威は、今世紀において疫病を除いて頂点に達したかに見える。疫病に代わって有害物質による大気、水、地表の汚染が広まりつつある。カナダは、これらの脅威から、今もとても遠くを歩んでいる国であるといえよう。国家としての統一性の弱いカナダには、他国と事を構えるたぐいのナショナリズムは発達しようがなく、第二次大戦以後、およそ戦争とは縁がなくなり、ベトナム戦争に反対し、兵役を拒否するアメリカの青年を多く受け入れ、アメリカの奴隷制度の時代に逃亡奴隷を受け入れた歴史を思い出させるのである。民族間で優劣を争わず、仲良くやっていくことを学んでいるカナダにあってこそ、とりうる態度であろう。

カナダ文学の大きな特徴として、少数民族の問題を扱った作品が多い。ヨーロッパやアジアから集団で移住してきたそれぞれの民族が、カナダの地に根を下ろすまでに経験した道程は、それ自体がロマンであった。先住民族と移住者、ヨーロッパ人とアジア人が、相争わなかったのではない。偏見や差別の長い歴史があって、ようやく争うことの愚かさ気づいたところである。

民族の間の争いにもまして、自然との戦いはまさに命がけのものであった。冬の寒さは、映

画でも有名になったルイ・エモンの小説『白き処女地』(原題 *Maria Chapdelaine* 一九一六)に見るように、雪中で登場人物が死を迎えるという悲劇を多く生んでいる。苛酷な大自然の中で生き残ることが、カナダ移住者の日々の願いであった。カナダ文学の第一線で活躍しているマーガレット・アトウッドは、カナダ文学のテーマをサバイバル『生き残ること』と規定して、主要な作品を同名の著書 *Survival* (一九七二)の中で解説している。

カナダ文学に描かれる自然は、冬の寒さだけでなく、春の大雨や、夏の日照りもある。シンクレア・ロスの小説『私と私の家のこと』*As for Me and My House* (一九四一)では、カナダ平原地方の小さな町における一年間の日記によって、大雨、強風、干ばつ、寒さのくりかえしがストーリーの重要な背景として詳細に記録されている。

このように脅威に満ちた自然も、広範囲の開拓と住環境の整備によって大きく変化した。かつては人間を襲ったおおかみや熊も、絶滅を防ぐために保護されている。自然はもはや敵ではなく、共存すべきものであり、保護すべきものとなっている。文学作品が自然のロマンを描こうとすると、昔話をするか、ロッキー山脈の山中や、北極圏に舞台を設けなければならない。いわゆる通俗小説として評判の高いハーレクイン・ロマンスの中の、サンドラ・クラークの『狼男』*The Wolf Man* (一九八二)やビクトリア・ゴードンの『意志の戦い』*Battle of*

Wills (一九八二) は、まさにその典型である。

カナダの魅力は、この美しい大自然と、平和な社会という、得がたい条件によるものであろうが、それだけで説明のつかない何かがあるようである。カナダの大都市トロントで公務員をしているある日本人は、カナダ在住十数年の後、帰国をすすめる親兄弟の希望もあったが、公務員の仕事も先が見えたところで日本に戻ろうかという気持ちが動いた。その決心をきめるために二週間ほど帰国したが、やはりカナダに住むことにしましたと言って、彼を待っている家族もないカナダへ戻って行った。彼の言葉から受けとれることは、日本社会のせわしき、日本社会のしがらみ、といったものにとらえていつて行けないというようなことであつた。私はそれを一種のカナダ社会の自由さ、おおらかさに馴染んだ人の言葉と受け取つたのである。

カナダの魅力は、筆者の場合カナダ文学の魅力にも通じている。カナダ文学へのアプローチは、大きく二つに分けることができる。一つは、カナダという国を理解するために文学作品をその手がかりとして読むものであり、もう一つは、文学作品を鑑賞することを出発点として、比較文学的に、文学史的に研究をすすめるものである。現在日本カナダ文学会という組織ができていて、七十名近い会員がいるが、第一のアプローチをとる会員の方が多い。また筆者自身のように、両方のアプローチを欲張っている者もいるのである。

本書に『現代カナダ文学』という表題をつけるについては、いろいろと悩みがあった。カナダ文学をその初め、という十六世紀の大航海時代になるが、その航海記から記述するとなると、膨大な内容となる。それらは大むねカナダ史が取扱しているところである。カナダ文学が、文学らしい作品を生むようになってから、というところ、十八世紀に入ってからである。それでもなお、おびただしい作家と作品を扱わねばならないことになる。しかもすでに、クララ・トマス著、渡辺昇訳の『カナダ英語文学史』（三友社―一九八一年）が出版されている。筆者としては、さらに焦点をしぼって、カナダ文学の開花期とも言える一九二〇年代以後の、つまり現在も当時活躍した作家の何人かが存命しているということもあって、ここ七十年間ほどの主要な作家と作品を扱うことにした。日本で言えば、大よそ「昭和期の文学」というのに当たるわけである。

本書は第一部においてカナダ文学を概観するが、ここでは十九世紀の作品についても、重要なものは触れることにしたい。それらは前述した第一のアプローチにとって欠くべからざるものだからである。そして第二部において、主要な作家の人となりを紹介し、代表的な作品の内容を解説したい。主要な作家の選択もまた困難なところである。筆者の危惧は、主要でない作家をあげるのではないかということではなくて、主要な作家や作品を洩らしてしまうかも知れ

ないということである。

カナダ文学を語る場合にもう一つ大きな問題がある。それは前述の『カナダ英語文学史』の表題の示すように、英語で書かれた作品のみを扱うか、「ケベック文学」と呼ばれているフランス語で書かれた作品をも扱うかということである。カナダ本国で書かれた文学史も、その多くが前者の体裁をとっている。たとえば現在もっとも重要なカナダ文学史と言われているカール・F・クリンク編の『カナダの文学史』の第二版、三巻、*Literary History of Canada*（一九七六）も、副題として『英語で書かれたカナダ文学』*Canadian Literature in English*となっている。

他方ケベック文学も合わせて研究対象としている研究書や雑誌もある。ジョン・モス編の『カナダ小説への読書案内』*A Reader's Guide to the Canadian Novel*（一九八一）などである。そこではフランス語から英訳されたものを扱っている。二つの言語を公用語としているカナダにおいても、両語を自由に読み書きするバイリンガルは、そうたくさんいないようである。とにかく本書においても、英訳された主要なフランス語文学の作品を加えて、ケベックの作家について紹介することが、多民族国家としてのカナダの文学を語る上で、本筋ではないかと思ひ、その章を設けることにした。

概観のなかで、いくつかのテーマを設定して作家を分類したが、妥当なものとは少しも思っていない。一人の作家を、一つの分類の枠に収めることは困難である。枠にあまりこだわらないで作家を見たいものである。そもそも文学をテーマによって評価するのは大きな誤りとする議論が、昨今盛んである。フランク・デイビーは、前述のアトウッドの『サバイバル』を攻撃している。⁽¹⁾ カナダ文学の第二のアプローチの立場に立てば、もっともなことである。しかし、第一のアプローチに未練をもつ筆者としては、テーマによる分類が、現代カナダ文学の理解に大いに役立つと信じてもいるのである。

本書の執筆の動機は、一九八二年にカナダ大使館の援助を得て、文芸広場社より『カナダ文学案内』という小冊子を出して以来、心の底にひっかかっていたものが、同僚の高山信雄氏の勧めによって顕在化したところにある。この三年間にカナダ文学に関する情報や資料は飛躍的に増加した。不勉強といえば不勉強で、それらを十分に整理することも、自らの血肉として吸収することもせず、この企ては冒険であると承知している。しかしあと何年たてば納得がいくように書けるかというと、それもまるで見当がつかない。新しい国の新しい文学を語るのであるから、早い方がよいであろうと自己暗示にかけて踏み切った次第である。

本書の出版に甚力いただいたこびあん書房の木村欽一氏からは、学生の利用できるものにし

x

てはというアドバイスを戴いている。そのようなものとなっていれば幸いである。高山氏と木村氏に厚くお礼申し上げて、まえがきの結びとしたい。

目次

まえがき	iii
第一部 カナダ文学概観	1
一 歴史を描く	2
二 開拓地にて	11
三 ユーモアとサタイア	17
四 大自然の中で	25
五 社会と人生	33
六 国外生活者	42
七 ケベックの作家達	51
八 地方の時代	62

第二部

作家と作品

九	女流作家	73
十	マイノリティの文学	81
十一	神話と幻想	90
十二	詩人たち	97
十三	批評家たち	108
	第一部 注	115
一	モーリー・カラハン『彼ら地を継がん』	126
二	ガブリエル・ロワ『ささやかな幸福』	135
三	シンクレア・ロス『私と私の家のこと』	145
四	ヒュー・マクレナン『夜を終える時』	154
五	ロバートソン・デイビス『第五の役割』	164
六	W・O・ミッチェル『誰が風を見たか』	174
	作家と作品	125

第三部 資料

参考文献

一 欧文カナダ文学一般

二 邦訳文学作品

三 邦語研究図書、論文、記事

カナダ図書入手法

一 カナダの図書を備えた図書館

七 マーガレット・ローレンス『石の天使』

八 ロバート・クラウチ『種馬を飼う男』

九 アントニン・マイエ『ペラジー』

十 ティモシー・フィンドリ『戦争』

十一 アリス・マンロー『娘たちと女たちの人生』

十二 マーガレット・アトウッド『浮上』

第二部 注

七 183
 八 193
 九 202
 十 211
 十一 220
 十二 229
 第二部 注 239
 参考文献 243
 一 244
 二 249
 三 254
 カナダ図書入手法 262
 一 カナダの図書を備えた図書館 263

二	カナダに図書を注文する	264
三	文学関係雑誌	269
四	送金方法	272
五	ペーパーバック・リスト	273
	現代カナダ文学年表	279
あとがき		287
索引		310

第一部

カナダ文学概観

一 歴史を描く

カナダ文学の概観を十九世紀から始めるとすると、その第一番に登場する作家は、ジョン・リチャードソン John Richardson (一七九六—一八五二)である。しかも彼はカナダ生まれの作家としても一番古い。彼の時代にまだカナダは英国の植民地であって、彼の生まれた地方は現在のオンタリオ州、当時の上カナダである。

父親は英軍の軍医として北アメリカ大陸へやって来た人物で、デトロイトやアムハーストバークなどの駐屯地にいた。この駐屯地というのは、独立したばかりのアメリカ合衆国から、英領植民地であるカナダに、軍隊が侵入するのを防ぐための守備隊のとりでであった。

一八一二年に実際に米軍のカナダ侵入が起こり、アメリカとカナダは戦闘状態に入った。リチャードソンはこの戦争に義勇兵として参加し、ティカムシという酋長の率いるインディアン部隊と共に戦った。彼はその後英軍将校となってヨーロッパに渡ったが、一八三二年に、『ワ